



関ヶ原軍記

三辭九二

辛四

遠13  
2207  
47



門へ遠13 持  
番2207  
巻47

池清

関ヶ原軍記三編卷之三拾三

目録

- 一 真田伊豆守上田城の上使の事
- 一 并真田父子岡持の事
- 一 上杉景勝上洛の事
- 一 并上杉佐竹減高藤生并
- 一 田丸手出の事

翻 譯 書  
 倭 軍 書  
 唐 軍 書  
 隨 筆 物  
 國々名所  
 近世戦争書類  
 右々外數品は座比留に收められ奉り置也

繪 本  
 書 本  
 滑稽物

曲亭馬琴之作  
 其外諸先生作  
 軍書  
 敵討  
 諸家騷動  
 御捌物

書物價目表所

東京牛込通二所  
誠史堂 池田屋清吉



関ヶ原軍記二篇卷之卅三

真田<sup>まつ</sup>保<sup>たけ</sup>夏<sup>なつ</sup>也<sup>なり</sup> 上<sup>かみ</sup>使<sup>つかさど</sup>りて上<sup>かみ</sup>田<sup>の</sup>

の城<sup>しろ</sup>は入<sup>い</sup>来<sup>き</sup>の事<sup>こと</sup>

并<sup>な</sup>真<sup>ま</sup>田<sup>た</sup>昌<sup>まさ</sup>幸<sup>ゆき</sup>同<sup>どう</sup>く幸<sup>あき</sup>村<sup>むら</sup>父<sup>ちち</sup>子<sup>こ</sup>用<sup>もち</sup>城<sup>しろ</sup>夏<sup>なつ</sup>

去<sup>き</sup>は<sup>は</sup>ど<sup>ろ</sup>平<sup>ら</sup> 真<sup>ま</sup>田<sup>た</sup>保<sup>たけ</sup>夏<sup>なつ</sup>也<sup>なり</sup> 信<sup>のぶ</sup>幸<sup>ゆき</sup>の

武<sup>ぶ</sup>具<sup>ぐ</sup>乃<sup>の</sup>用<sup>もち</sup>意<sup>い</sup>も<sup>も</sup>七<sup>しち</sup>代<sup>だい</sup>常<sup>じょう</sup>此<sup>こゝ</sup>通<sup>とほ</sup>り

よ<sup>よ</sup>く<sup>く</sup>信<sup>のぶ</sup>別<sup>わか</sup>は<sup>は</sup>下<sup>した</sup>向<sup>むか</sup>り上<sup>かみ</sup>田<sup>の</sup>

城中へ入らん少くもは父安  
房がいのこのそと人 慶重之  
うつて立入り難くその人  
能人よとも能人むらり一  
まきの用意ゆ急候是も  
も申さるる入りと心  
も是候と極めたる所りさ  
よてあつたれぬ百指男は人

殺敵のめく攻るとも容易小  
前城より見る見くきりり  
この時候是も能人や  
之に人よと城中より入り父  
対面して是も  
内府公のし意あり又この後  
候是もが福がひりりり  
父君のびお中幸村も助命

を 作身なりより依ての安堵  
を 爲すしとやりの時安房守  
て此度の一戦子の後人よても  
討人子来きり一世一代の弓  
矢を破りて討死すべしと  
おのひつりしより既子合戦の  
次方の敵方 中納言度  
少教のりて子並多き見せおま

より志るるに今  
内府公法念頃して汝らと  
討人子つらさるるを我邦人  
の来つて責るとも容易に成  
城をさすやと知りあひて  
初のごうく知り我今弓矢の  
義理越極むるは子骨  
あらびるんぢと討んる子

の内より有と無と云ふは  
父の道より皆く子も左串の佐  
も同じ父祖の承智の嫡子ある  
は汝らがお徳も是るの理あり  
象又一分と云ふ時を伴はざる  
飛香もるるべし一雨後汝ら  
が中をむす子一何を安んずる  
左串の佐の父子友人南城城

むすむす浪人をもてあつり  
今一くろく夫よりおくろく  
何れんきむすむす父子の  
あつりも義理あるあり  
我武つを推し汝らが長久を  
知れぬりこの一も急を退  
くべし一とて城内の武具を  
重銀木を傳代者云ふ分敬

の用をすし死南はるべし  
さうらにああるくは次男左衛門佐  
時郎有て軍勢の折は欠集  
まらるべしとぞ命とりたるま  
信州旧好徳代の武士三百人  
をあるく浪人として同出領  
の内平引りてありて是去十九  
年大坂お於て真田左衛門佐

幸村が子ありありありあり  
よつとく志田が軍兵若くは皆  
勇剛のそのあり安房も同く  
左衛門佐の父子は志田も左衛門  
松田も左衛門大徳次郎助等  
その外徳代は死をすし是れ  
等又人越る是しとて金銀を  
浪人の終へるごとお意し取持

新代乃武具ちりまのりて  
廣長六年八月まき上旬か上田乃城と  
伴とも夏なつ者もの千ち汲ひして紀き別べつ高たか野の  
山やま一ひとおのむら橋はし本もととりのあり  
居いるらししがそのちち竈かまど山やまの  
のの新あらた子こ移うつりり執と事じ居いして  
嘗なつくくししははが同おなく十九年じゅう斥せき  
相あ互ひ元もと吹ふ巻まきして大板おほよりり法はふ

頼たのみみふ身み友とも傳つたへへ依よるる大板おほは  
入い城じやうして武ぶ常じやうあありりりり  
まましし伴とも夏なつ者ものが孝かうをを千ちりりして  
安やす房ふ者ものが鉄てつ石せきののどど紀き武ぶ常じやう  
も子こと名なあありりりりりり上かみ田た  
の城じやうと名なあありりりりりり上かみ田た  
是こゝ親おや子これ情なさけももいいひひつつぜ



上杉景勝上洛の事  
并上杉景行滅する蒲生氏郷  
代り出る事

徳川家康六年より上杉  
景勝の結城の事彼こそ  
お徳あつくり上洛致さるる  
事ありまらむ事ありその  
事あり

が逆取の時

内府公の事

洛の幕上杉景勝  
撤守の事主人景勝  
をさすめけ  
せり慮りのりて  
お出で  
家康公の  
内府を慕ふ  
とて上杉景勝  
を討つ事成る事  
あり

してこのうへに騷動を起す  
ざるとうへあり新撰を起す  
倭を山城が公迎致す  
たれば吳倭及むは終る  
徳川慶長つありふり  
手あはれは此より好む  
登る事しつらむと向ふ  
ありしつらむと自今一人

の難を一万の余の軍  
城ありしつらむと向ふ  
細谷城を七ヶ城を攻む  
このせむ倭を政宗  
加勢として陣を  
幕も又直江を物  
陳しに幕致す  
九月十八日石田治  
中捕二

関ヶ原を敗軍にらしむとさう  
系勝も会津へ退いて相方の  
車江を居陣未澤へ移りし  
志をうくせしは沙汰を足金  
りり終るす交長六年の春  
内府公は下知として信城  
秀康より上杉系に  
挿入らるるのうび先飛

悔んで上洛致さるに於ては  
免降のりすと名持りあはる  
あり又内府公よりも  
系勝上洛を祈るる言ふ  
度しそのむす作下され  
報身迄はと會津へ中送る  
より系勝上洛せらるべき  
とのりなり山城を陣あり

このすびの上洛するに於ては  
必定事地り又台一の石領地を  
叔父んまよりこの今津に  
このりてふてびて下と初り  
さむ佐竹も合陣あり又勇  
筋もてこのごろろ矢を  
しつ又内通れ人なるあつたは  
上洛のこの交ては無用之

止りあり終れ若葉掃く  
めちうく我初年れ秀頼  
對ててうみる石田も亡  
びてきた下安楽の言  
何と見てもありこの世  
矢ありてはよく全神  
上洛有るに借のさうひ  
月がくみ松崎を長く直江

山城守とてしどめ守修良校  
時酒田長尾松原耳耩也  
始ありて難言子四百人  
上洛ありゆる干急く  
徳川家より上洛押し  
この結城秀康は蒲生秀行  
を弟も同及るに慶長六  
八月廿四日伏見千止  
若かり

同く廿六日伏見の城は  
付日ありしなり  
るりやま  
押しのしめ加利利長  
むり吉田徳重も  
つと支大おとて  
を毫して人殺  
級より上洛系  
係しけ

ら所 かしらる時 各 功 職 事  
登 紀 之 所 用 之 事 あり 創 ち  
法 律 及 以 披 考 案 籍 也 法 礼  
之 事 あり 之 事 あり 之 事 あり  
不 個 法 御 免 地 籍 也 之 事  
系 け 之 事 あり 社会 せ 之 事 あり 之 事 あり  
あり 肉 府 公 局 之 事 あり  
此 度 乃 上 法 之 事 あり 之 事 あり 之 事 あり

留 之 事 あり 之 事 あり 之 事 あり  
懐 地 以 之 事 あり 之 事 あり 之 事 あり  
妙 妙 あり 之 事 あり 之 事 あり 之 事 あり  
大 將 松 平 伴 五 郎 李 卒 丹 波 守  
左 右 子 あり 之 事 あり 之 事 あり 之 事 あり  
右 一 後 引 之 事 あり 之 事 あり 之 事 あり  
井 上 之 事 あり 之 事 あり 之 事 あり 之 事 あり  
は 養 意 地 籍 也 其 後 本 多 依 後 守

大久保お揃きとありく  
作出さくつりのうび政の  
手そどめあるが逆心徒黨は羅  
を糲うごら車るりあつて  
世よの人ととを落あすある  
このあ人今津百萬石とを  
跡に百放され年んぬれ  
ども上格を回衆たり改選の

中歌ふく 一 百ふ  
うめて新船米澤を三拾二万  
石成終りるの条さく 西勢  
あつく又衆人も後代り年  
の跡に離教させらえま也  
赤直江山撤さるりのうび  
西乳明 作舟のけの飯  
格子のちるれを右船の肉

六百石配當せしむるに、そのうち  
のぐらりのものせり、宗務のつづ  
神妙にして、其の上流のて  
く、角の中、糸を是るく  
は、約千二百石、約り、事  
結核の候とぞん、なり、い、糸  
人とも、扱、仕、り、不、是、是、る、く  
い、との、り、ゆ、上、松、家、を、お、と、ち

ぐらりのあ、六、拾、万、石、す、て  
蒲生、屋、三、郎、千、一、百、石、の、こ、れ  
亡、父、の、回、願、を、る、に、ゆ、つ、く、る、り  
別、ち、飛、騨、と、改、名、を、こ、ん、な、で  
父、の、あ、と、な、は、石、田、三、郎、千、一、百、石、  
され、宇、津、文、十、八、万、石、る、り、千  
今、般、返、し、ゆ、め、り、の、の、せ、り  
佐、竹、美、室、も、先、非、越、く、や、そ、て



りうくくと

秀忠の歌

さきなり小幣とて上洛し依見

ふ人れん海がけの時いふに礼あり

以前池田輝政 淡路 樽原繁

後臺にめんくす 作付

うんくしてり 依井義宣中渡

を快不同るる急度追討仕

多へまよしそく子くまに

うむく 上役とて井上

斗及中依行が屏ま一り

ゆり海さるるこのさび

義宣の逆賊たる石田治政

子よ力一 大坂を控む此結

搦奸謀城めりしその人

奥刻會津の上松原と刻合て

送んせしちうごろ石原

子新ありよりく 承名の改  
絶く入るのともあり 佐井の  
源氏乃旧家より 裏側これあり  
中 同性旧家此より 月と以て  
御命より 作身らうとあり  
ども 水戸願八十万石をば 悉く  
百放され 新地或拾万石 改賜  
りりゆのむとありのべり

佐井義宣これと受けとあり  
平依して 委細畏よりあり  
上意乃候と在るも 疑身仕合も  
あり 絶くお依竹信代の 殿前  
旧領より 水戸乃内より あり  
有はと 承名この 邦より あり  
これありくゆと中より あり  
ひの 通り 作身ありたり 地

今の二万ぬき石とぬり佐竹打  
あし二十万石余り伊軍被破  
お新ありらるるのせり武田信  
吉の是迄下総國佐倉三十万石  
之しげこの新を恐どて水戸  
願或拾万石破りらるるありは  
入部ありこれの武田信吉の息女  
の後子に生れ公を建ししげ

今聖年伊早世存迄或は常  
陸女及にお續ありこれ今の  
純別家なり

池清

実ヶ原軍記二篇巻の廿二終

池清

池清

関ヶ原軍記二編卷之世四

目録

- 一 家康公ノヤマシ 上杉康元ノカミ 入河ノカミの事
- 并 倉ノクラ 意ノイ 直ノナ 江ノエ 兼ノカミ 継ノツグ の心ノココロ 膽ノイデ をとく事
- 一 内府公ノウチノフ 直江兼継ノナガハタ の心ノココロ 膽ノイデ をとく事
- 并 大佛殿ノオホツツミ 再ノマタ 度ノタビ 燒ノヤク 失ノシ の事

油漬

関ヶ原軍記二篇卷之三拾四

家康公いえやす 上杉家うえすぎ 入野いりのの事

并河合なかつ應おとの序しり直な江え幕まくら

大膽おほたんの事

いそ〜下したの関せきヶ原がはら一ひと羽はの事  
湖うみ平均へいきん志しりりととの事  
逆城さかぢの事こと堂どう始はじめ終はつ乃なり滅めつハ

古くよりおとの評判ある  
天中其の氏をめぐりて安んずる  
ありて  
夫ありて今殺逆徒の張本  
とら上程業務の録は 入所  
有るに於て日食意をめぐりて  
そのせりて東江山は山城を大  
膽乃は法に人これをめぐりて

邦多天下の安んずるの  
月四日大仏殿焼失す  
徳候とて

嘉康公將軍 宣下と蒙り

終り

名書なりて疑ぐひある  
時の刑罪絶せしめて下  
邦を下にめぐりて

雜説（雑説）よりしつて天  
下を治むるもの鬼角（きかく）以下  
知る時（し）これなること（こと）は  
れこれありておこる一志（いっし）んは  
肉も能（よ）がひる時（し）を父子  
夫婦（ふうふ）のうちにても安（やす）泰（たい）あ  
らば只親（おや）の調（しら）ふ時（し）を全く  
能（よ）がひる一平生（いっぺいせい）とのし

うごがひは福（ふく）んを能（よ）くして  
常（つね）て物（もの）を速（すみ）くしつて  
改定（かいてい）は是（こゝ）より志（こゝろ）をなれ  
人智（ひとち）の發（はつ）明（めい）ある物（もの）として  
大（おほ）く推（おし）量（りやう）して能（よ）く  
よ押（おし）斗（たう）らるるり持（も）量（りやう）するもの  
扱（あつか）つて改定（かいてい）なる事（こと）之  
朋友（とも）と交（まじ）りる事（こと）一能（よ）がひ

あくつての毎ま日に送まんまく  
和に順じゆんたう車くるまるる又また下した  
此こ流りゅう云い雜ざ流りゅうの流りゅうけけこれ皆みな  
下したままううううひひて送まんまの左ひだり  
あり仕し至き法ぽう会かいととのの時ときの  
是こゝ皆みな上うへ下した法ぽう会かいととののりりん  
百ひゃくりり下したりり上うへ下したりりをを  
理り心しんあるやうににああ流りゅうを

いふ又平生の人ひともあ流りゅう人ひと  
のああののぶぶととささ流りゅう忍にんせせうう下した  
いふ先まへのの人ひとうう解かい流りゅうをを  
ががひひののううああるる者もの斗とり  
あありり会かいくくりりるる流りゅうをを  
あり下した雜ざ流りゅうををややりり  
つつむむ唯ただ大だい將しょうのの一ひと志しん  
作さく略りやくををりりるるののせせりり下した



糸節のごとく取らぬと

糸節とりのり

糸節公殿平均一のり

糸節公殿平均一のり

の友友ありは時

東照宮御忌意有く上校

糸一御成あつて人口校

糸一平均の基ひを算成

糸一平均の基ひを算成

去程り上校 依行の支那も

上校方て 御免校蒙

むり天下静體とらるといふ

糸一徳人殿忌意天下は静

糸一先を治せりといふ

糸一先を治せりといふ

内府公は治



徳人の志るところなり  
がしをきんぎの平の家の  
有とて則ち系孫を  
ふのうび中納言久信をして送  
私をいひ上洛して今津を  
難色しやん総使をして天下  
もあそびなりふく  
系孫屋敷より入り近頃世の幸

労と晴るるやまふありと  
ゆせられり系孫をうねく  
はしんで降伏するは品今  
内府公乃御ねんごうなる  
ふまの天下は耳目といひ武門  
の冥加こそきりては上下和順  
れあつりつとさつちりや  
系孫を俄に屋敷の雪清して

十二月二日

御成平 御極る

そのせり直江山城より中へ  
走り出りくお徳をらにまづ  
本多忠勝城よのみま持人  
しつゝいふくくつとつ合せ一城  
脱り 御成の目限お起り  
てふ松乃泉人おまのそつに  
屋敷の内を拂ひ却 秀康は

の湯人殺や入を替へたりこの  
仕方の一とんと下宰ありま  
御料理多湯屋新役人城頼と  
く屋敷の内子。のそらに系務  
と直江 車頼の友人斗りあり  
造作おの景勝様く急と入して  
景員をこそとれり又  
内府公の御借平の井伴直政



千石の海へびとあひく御換

授く 嘉康公より

も系孫は市太刀と下されたり

是の浮田系の家室を同養ひ

系次なり叔父より上代のを長

直江山城者と 御前江

石出さるこの良純の弱み

遊瓜身とらや金積と教台程

もつるあぶたると清子にゆち

あひて山城者とと来りゆ

これいふとび鑄させし重鉄

なり珠と子おるれを直く

きりきと手えし系りゆと

石のあけり山城者と眼を

金刀と神前へ送出るを

を眼とる者なり

所前より出く扇子と云く  
この金鏡をいづくんと云く  
師手づく下さるる心る傳  
手尺也 内府公御鏡ト  
て扇鏡か一毛くくく  
て手にあるくこの  
ふさあり志くんを虫の巻  
角小扇子と云くすく

是形手より取くく苦くく  
この 作せるりこの時山城  
中くくく 上くくく  
重銀又を珊瑚瑪瑙くく  
尺中くく変の形容の鏡くく  
鏡を凡下れ者たのくく  
物くくく手宋幣と云く  
古年と下知仕り死生と云く





家康公乃涉社辱於何處乎  
一ても為べしやう無きとてあ  
に 家康公も後身  
東照宮を神靈社殘しとて  
何どの 御名將あれたるや  
も忠をあらはし御笑ひあつて  
いり小山城さるんぢがりあ  
とてあつたもあつた

又汝ら知らばや建徳の像  
石履乃達摩也履持孫の像  
あり是れを万人を海度さるれ  
孫殺持玉の手に指と持る  
張良も和漢中秀で 智深の  
りのみして人の稱員とて  
漢乃天下四百年れりしは  
く 良乃ありとて 乃其石公也

師として水中に身を投ぐ  
志しつゝ又誓と錢とあつらふ  
ん古来初ののどくぬり又  
我らんぢが師として事と傳へ  
ん此度の私法中りては是より  
予も汝らも再軍に指揮せらる  
る中にあつたりて下まつらる  
平均一百姓も安全しつゝ

き徳よ下樂しみと同ど  
すれば時より當りて日本通用  
の錢を手に取りてそそ左近  
釋を少毛筆のまじりて後  
予も汝らも汝らも汝らも  
交りしその上意あり  
らんを流石に直に乃横着者も  
此理よりつゝその人

東照宮の御威光素く直に  
及載して御次は志りぞく  
級を編むる時を實にお  
東照文を御名將あり却  
ごら紀時多しゆ故のも  
とありひく石履を産  
乞く深きおごるべ  
内房公さかへし御  
あつむ

してこの級を御物語り有  
是級を編むる時を實にお  
級を編むる時を實にお  
これらありて  
御名將也  
所級を天下に譽なり大  
の張本在江山城も  
御免御嘉むり  
下れごごひ晴てさす  
別条

あーとして修布れ老臣沼江梅  
津本主人千上活をささぐめて  
二心ちうく其所を人質出さ  
よふつくおる 津程 南都本  
乃を長等もさあく主人を  
部めて二心ねくおのく人  
質をといごも物玉の相浦 お良  
おそ志うりうつく白せんも

天下茶平の基ひとあなり  
部く 家康公の終日  
御機嫌先帝長存を 還御  
系孫もろ能事旨帝程中上  
らる徳宗は後鴻津修理吉次  
事も承智をささぐめて  
内府公政招請成り奉る此節  
此節感あるく以對存る余人を

文ら能事大敵新のぶく  
あられを世の人にもろ所安堵  
りるとうや又より慶長七年十二  
月四日京都の大仏殿焼失  
これより古寺園秀吉の建立あり  
室積より南都北條ありとう  
されく徳島の神社の森林と  
云り又又源山大山の樹を切り

不徳人の骨と破るべく  
湖に付堂成終つる時去如多  
文禄六年七月十二日大地震  
しるく破れ流る流石の大  
堂破れ俄の造管やうさう  
て本寺ともい破るつを依て  
古園下急あつて徳別管亮寺  
れ如来殿名寄せられ滅後

内府公の所下知るるれりとの  
御書文々々々々々々々々々々々々  
しるす古太容の御形重るるんを  
急ふ政所より造管より  
とのよりありこれの古太容の  
時より金銀おむり  
政所より納めありあり下り施さ  
せんがとありあり慶長七年此冬

堂塔大概り其来志るる以前  
れとくこれ立疏りん編り  
雲地貫接ごり其体り  
四方也廊朱の玉垣木大造管  
して日本金銀也本字り法玉  
の鑄物所ありありて鑄造り  
今の所首斗りには故く鑄造り  
たてまつるるりせん然る鑄造り

御膳の中へ振まへしに人若く  
それを知りて成乾して鑄物  
師ありびり法役人多く之り  
かり終るお膳の内より銀の  
紋本可辨守しが急めぬ人  
ふらば教別とてく馬糞のいで  
かれは徳人大きく押さぬまで  
速くその肉く厚利くくと

糞湯沸くより出ると等し  
く文殿様寄りり人射二十  
三同堂怒り清水八坂迎いで  
一時よりくおう風烈  
く紅梁くをりれ特房  
喜の金梅際り笑へ御堂の  
大腕く八音くさんらん  
喜の喜と盗銀を笑ふお社

均とれと成室と奪ひ取り又  
近き乃ち其院もことごとく焼  
失せし後く伏見乃ち役人共おき  
乱婚を割はるは金さく古き園  
地法乃ち重銀決りてく百氏決  
骨して建立有し秀吉公乃  
令銀多法人跡まの中あり  
出たる故乞佛の正及手叶の

ごら取手やさうもの大伽藍  
もあ後乃破あつ手野原と  
ぬりしはまら手は漢君し  
の寺之池清

関ヶ原軍記二篇卷の世也 池清



